MUSEUM NEWS

秋田県立博物館ニュース



CONTENTS

01 表示･目次
02 展示報告　秋田の大地と成り立ち
03 展示報告　わけあって絶滅しました。展
04 活動報告　『軒の山吹』再現
～菅江真澄が記録した華やぐ季節の風習～
活動報告　教員のための博物館の日2026
05 学芸ノート　菅江真澄と百川学庵
06 学芸ノート　土器が語る数千年前のくらしと半世紀前の青春
07 学芸ノート　神主の廻文の謎を追う　－古文書整理の一断面－
08 博物館の風景　博物館教室／イベント・行事

新着収蔵資料紹介

モンキアゲハ

黒い翅(はね)に黄白色の紋をもつモンキアゲハ。関東以南の暖地に多い大型のアゲハチョウで、幼虫はカラスザンショウなどミカン科の植物を食べます。2021年ににかほ市で採集されましたが、これは1954年に男鹿市で採集されて以来、県内では67年ぶりの記録になりました。かつては珍客だったチョウが、今後秋田県で普通に見られるようになるのでしょうか。

NO.183

展示報告

令和８年４月25日(土)～６月28日(日)



秋田県で最も古い岩石ができたころから、現在までの約２億5000万年間。その間に秋田の大地が作り上げた、岩石や鉱物、化石、秋田県で起こった様々な地質現象を取り上げる展示を行いました。

開催にあたり県内のジオパークの方々、ボランティアの方々に多くの協力を頂きましたことを、この場をお借りして感謝申し上げます。

第１章　白亜紀以前の地質

秋田県の白亜紀以前の地質資料は岩石のみのため、岩石を中心に展示しました。この時代を代表する化石は秋田県外の標本を用いました。



第２章　古第三紀の地質

秋田県ではこの時代の地層は男鹿半島に広く連続的に分布し、植物化石も発見されているため、男鹿半島の岩石と化石を展示しました。





第３章　新第三紀の地質

秋田県でこの時代の地層は最も広く分布し、多くの鉱床や化石が発見されました。また、日本列島が形成されたのもこの時代です。



幕間　鉱物化石博物館

新第三紀は化石の産出層準や鉱床が形成された時代でもあるため、特に美しい化石や鉱物の標本を展示するためのコーナーを設けました。





第４章　第四紀の地質

現世を含む若い地質時代で、男鹿半島の安田海岸の剥ぎ取り標本や貝化石の展示を主として行いました。





秋田県には八峰白神ジオパーク、男鹿半島・大潟ジオパーク、ゆざわジオパーク、鳥海山・飛島ジオパークがあります。本企画展の最後に、この４か所のジオパークを紹介する展示スペースを設けました。

(地質部門：鈴木照洋)

令和８年７月11日(土)～８月30日(日)

わけあって絶滅しました。展

■主　　催　わけあって絶滅しました。展秋田実行委員会
（秋田県立博物館、ＡＫＴ秋田テレビ）

■特別協力　（一財）進化生物学研究所・東京農業大学

■協　　力　ダイヤモンド社、東海大学自然史博物館、
長崎バイオパーク、野鳥彫刻家　内山春雄、
山階鳥類研究所、和歌山大学（順不同）



ロビーではトリケラトプスがお出迎え



当館蔵のナウマンゾウの歯も展示しました



実物大バナーは大迫力



絶滅動物と記念撮影

人気の図鑑『わけあって絶滅しました。』を原作とする展示会で、東北地方では初の巡回となりました。「隕石が落ちて絶滅」「筋肉ムキムキで絶滅」など生物の絶滅事情をユーモアを交えながら紹介し、夏休みは家族連れでにぎわいました。これまでに地球上で 99.9％の種が絶滅しており、人間にとってもひとごとではありません。展示は生物の生存戦略や自然環境について考える絶好の機会となりました。開幕初日は図鑑の著者・丸山貴史氏の講演会が開催され、元気に質問する子どもたちの姿がみられました。

（展示・資料チーム：新堀道生）

活動報告

令和８年４月25日(土)・26日(日)

『軒の山吹』再現

～菅江真澄が記録した華やぐ季節の風習～





江戸時代の紀行家・菅江真澄は、今から215年前の文化８年（1811）に秋田市の金足地区を訪れ、当時の様子を『軒の山吹』という日記にまとめています。丸めた餅を長串で貫き、それにヤマブキの花を束ねて家々の軒先に飾る風習は、長年旅を続けてきた真澄にとっても初めて目にしたもので、特に印象深く残ったようです。この風習には魔除けや家の吉兆を占う意味があると考えられ、軒に挿した餅を鳥がついばんできれいになくなると吉兆であるとされました。

およそ200年前に菅江真澄が見た当時の景色を再現し、華やぐ季節の行事として地域に定着させたいと考え、平成17年（2005）からはじまったこのイベントは、今年度で20回目を迎えました。

当日は、里山を所有する方からのご厚意と博物館ボランティア「アイリスの会」会員の協力を得て、午前中にヤマブキの刈り取りと飾り付けを行い、当館分館・旧奈良家住宅（重要文化財）に当時の風景を再現しました。二日間という限られた開催期間とはなりましたが、軒先を鮮やかな山吹色で彩った風情ある光景を多くの皆様に楽しんでいただきました。

（普及・広報チーム：小野博美）

活動報告

令和８年８月６日(木)

教員のための博物館の日２０２６





「教員のための博物館の日」は、各種学校の教員に、博物館に親しみを持ってもらうとともに、学習資源への理解を深め、学校教育に活用していただくことを目的とした全国規模の教育支援事業です。

秋田県立博物館では８月６日に当イベントを開催し、幼保・小学校・中学校・高等学校・特別支援学校等から13名の教員が参加されました。当日は、秋田県が推進する各種教育機関における「セカンドスクール的利用」を念頭に、各部門の学芸職員の案内により、人文・自然展示室や、昔の暮らしを体感できる分館（旧奈良家住宅）の見学を行いました。さらに、歴史部門の資料を用いた「模擬出前授業」や、「貸出可能資料」の紹介など、学校の授業で活用可能な当館の学習資源を体験する多彩なプログラムを提供しました。見学や研修の合間には、担当する子どもたちの反応や、具体的な指導場面を熱心に想定している教員の姿が随所に見られました。

参加された方からは「実物を見せ、専門職員による解説を聞くことは、子どもたちに大きな刺激やインパクトを与えると感じた」、「出前授業や資料貸出をぜひ授業で利用したい」など、本物の資料を実見する価値や授業での活用に関する多くの感想をいただきました。

今後も「来館しての体験活動」「出前授業」「資料貸出」の３つの柱を中心に、学校と博物館が連携･協力し、充実した教育活動を展開していけるよう創意工夫を重ねてまいります。

（学習振興チーム：奈良　香）

学芸ノート curator's note

菅江真澄と百川学庵

近年当館で発見した真澄研究における新知見に、百川学庵（ももかわ・がくあん 1799～1849）に関するものがあります。学庵は津軽藩の絵師・文人で、通称は文平。名は子琢。字は璞。号は学庵、樫斎、瓢園、蘭叢など十一にも及びました。江戸の朝川善庵の下で絵を学んだ後、谷文晁の影響を受け本格的な開眼を得たとされます。文政４年（1821）、23歳の時に津軽藩に出仕。絵に限らず、儒学、詩文の才を認められ、小姓格となります。【青森県人名辞典（東奥日報社・昭和 44）より】

この学庵が、真澄と直接会っていたことを示唆する記述を地誌《月の出羽路仙北郡》第９巻に見つけました。同巻には仙北郡大曲の斎藤勘右ヱ門衆隣所蔵の「古鏡」５枚を書き写した図絵があります。この図絵を描いたのは真澄ではなく、「大江戸の画工、蘭叢」という人物でした。多忙な真澄が自身の代わりに古鏡を描いてくれるよう、その人物に依頼したとのことです。それを裏付けるように５枚の古鏡の図絵の後ろに「菱花堂衆隣所蔵の古鏡数品の内、真澄翁のもとめに応じて写す」と記され、「瓢園」「蘭叢」の署名とともに、落款が捺されています。

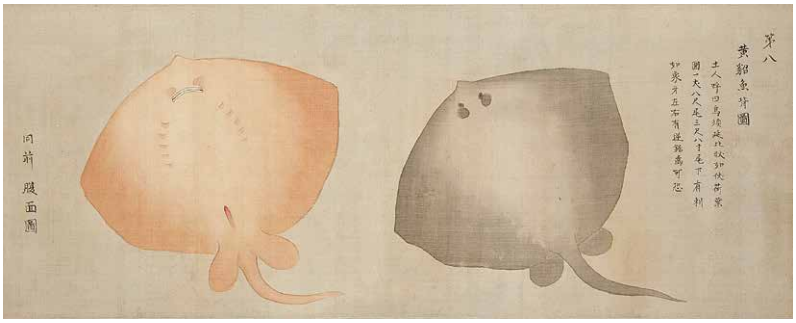


《月の出羽路仙北郡》第９巻・個人蔵（国重文より）

真澄が「大江戸の画工」として認識した人物は、署名に用いられた号から百川学庵その人であったと考えられます。学庵は「津軽図譜」などを残したことが知られていますが、謎の多い人物とされています。真澄の記述を根拠とするならば、学庵は文政10年（1827）頃に秋田藩領の仙北郡大曲の地を訪れていたようです。江戸から津軽へ向かう途中、またはその逆だったのでしょうか。

「津軽図譜」は、学庵が津軽地方の風景・風物を描いた25枚の連作です。津軽各地の景勝地のほか、藩の御用船「永徳丸」や鳥魚類なども含まれており、博物画的性格を合わせ持ちます。その中の一つ「黄貂魚」の図絵は、エイの背面と腹面の両面を並べる構図で描かれています。図絵説明文を意訳すると「土地の者はこれをカスベと呼んでいる。その形状は伏せたハスの葉のようである。全体の大きさは一丈八尺（約 5.4m）ほど、尾の長さだけで三尺八寸（約 1.1m）もある。また尾の下部には象牙のような棘（とげ）があり、その左右には逆向きの鋸歯（きょし）がある。恐ろしいものである」となります。対象となるものの表面と裏面を描いたり、大きさを数値化したりと、学庵には実物をできるだけ正確に記録しようとする姿勢が見られます。これは真澄にも通じる点です。真澄も対象物の表面・裏面を描き分けたり、細部の寸法を数値で示したりするなど詳細な記録を残しています。

また真澄から依頼される形で古鏡の図絵を描いた学庵でしたが、一方、文中で「真澄翁」の上の部分に一文字分の空白を設けています。これは「闕字（けつじ）」という相手への敬意を示す表記方法です。学庵の真澄へ対する思いが推し量られます。いろいろと会話を重ねるうちにお互いに共通する部分を感じたり、尊敬する気持ちが生じたりしたのでしょうか。想像が膨らみます。



「津軽図譜」・青森県立郷土館蔵

（真澄部門：角崎　大）

学芸ノート curator's note

土器が語る数千年前のくらしと半世紀前の青春

人文展示室には、湯沢市の鐙田遺跡の土器が展示されています。ススで黒くなっている深鉢土器は煮炊きに、ススがついていない台付鉢形土器は盛り付けに使われたと考えられます。数千年前の人々のくらしを想像することができる資料です。しかし、展示されている土器以外にも収蔵庫には収納箱70箱をこえる遺物が静かに保管されています。白の塗料で文字や数字が注記されているこれらの遺物には、今から半世紀以上前の秋田の高校生たちの記憶も秘められているのです。

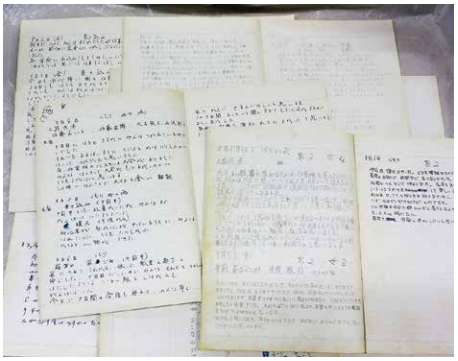

鐙田遺跡土器（湯沢市教育委員会所蔵）

昭和20年代から昭和50年代まで湯沢市周辺の遺跡を発掘調査した山下孫継は、高校教員として生徒に考古学を指導し、発掘の補助を通して実践を積ませました。その活動は、３つの高校で構成される「秋田県南高等学校考古学研究協議会（高考研）」となり、最大100人を超える組織に発展しました。高校生たちは、発掘から洗浄、注記（書き込み）、復元とあらゆる場面で活躍したのです。


収蔵庫内鐙田遺跡遺物（湯沢市教育委員会所蔵）

当時の彼らの熱気を今に伝える記録があります。昭和48年８月２日から４泊５日の日程で行われた、遺物整理合宿の『鐙田合同合宿記録』には各班から次のような声が残されています。

「私たちの班は書き込みをしました。最初太い筆だったためもあり、小さな土器・石器には書きづらいでした。その上、いすや机が低いためきゅうくつでした。」「一日中じっくりと机に向かって筆を動かすだけの仕事には、あきがくる。」「午後も土器洗いをしたので手がうるけてしまいました。」「最後に一言。腰が痛いヨ～。」


高校生のノート

「カセットを聞きながら土器洗いをしたので歌謡曲や人気歌手の話をしながら親善を深めていきました。」「夜中の３時ごろまで、おしゃべりをしていて、みんなにめいわくをかけ、悪いことをしたと思っています。」「先輩がとてもていねいに教えてくれたので、失敗ばかりでしたが、おもしろい作業でした。」


注記された土器片（湯沢市教育委員会所蔵）

単調で延々と続く洗浄や注記の作業は、過酷でした。しかし、彼らは粘り強く取り組み、絆を深め、知識と技術を伝達していったのです。彼らの熱意は、先輩がテキストとして残した『考古学研究における一般的知識』から受け継がれたものでした。

「破壊した遺跡は完全な手段をもって学問的に解明し後のためにすべての資料－報告をしなければならない。」「我々の祖先も今日まで伝え続けてきたものであるこのバトンを後世に伝えるべきだ。」

自分たちがバトンを次の世代へ受け渡すという強い使命感で彼らは考古学に取り組んでいました。収蔵庫に保管されている多くの箱の中の遺物には、縄文の記憶だけではなく、半世紀前の高校生たちの青春の息吹が秘められています。

人文展示室に展示されている土器をご覧になる際は、数千年前の営みとともに、彼らが未来へ繋ごうとした「情熱のバトン」もぜひ感じ取って下さい。

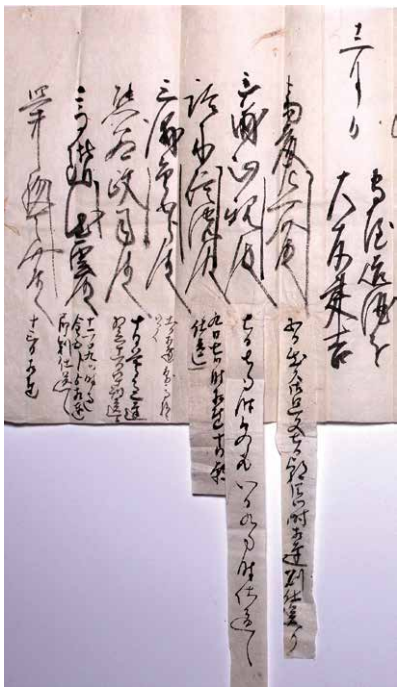
（考古部門：渡部　猛）

学芸ノート curator's note

神主の廻文の謎を追う ― 古文書整理の一断面 ―

博物館の守屋家資料は、大友家とともに保呂羽山波宇志別神社（現・横手市大森町）の神主を勤め、秋田藩の社家大頭を勤めた守屋家の資料群です。秋田藩内の社家は、大頭を勤める大友・守屋両家の下に組頭の神主がおり、更にその下に神主がいるという構造になっていました。藩は神主に法令や通知する事項がある場合、社家大頭に文書で伝え、大頭から組頭へ廻文を回す形で伝達されました。

〈写真〉は廻文の末尾を写したものです。大頭は廻達する配下の組頭の名前を記します。廻文を受け取った各組頭は、これを扱った日時を記入しています。守屋家資料約9,500点のうち大頭が組頭に出した廻文は82点あり、この中で廻達先の組み合わせが最も多いのは、熊谷政司（六郷町：現美郷町）・斎藤左一介（神宮寺村：現大仙市神宮寺）・鈴木信濃（角館町：現仙北市）・高階出雲（湯沢町：現湯沢市）・照井総之介（八沢木村：現横手市大森町）・三浦金五郎（金沢村：現横手市）・三浦正親（高関下郷村：現大仙市高関下郷）宛ての廻文で12点あります。この12点中、上の７人が廻文を扱った日時を記載している６点を〈表〉にまとめてみました。



守屋家資料［廻文］（A-008-0099）

すると、大友・守屋の両大頭が最初に廻文を渡すのは、斎藤左一介か照井総之介で、二番目以降に廻達される順序が異なっていることが分かりました。

同じメンバーで回覧されるのに、なぜに順序が異なるのでしょう？

その答は現時点では全く分かりません。しかし、この謎を解明することができるかもしれません。というのは、今年の７月から本館の古文書整理ボランティアで、組頭の一人である熊谷政司の古文書の整理を始めたからです。

守屋家と熊谷家の古文書を合わせてみることで、廻文を出す側と、受け取る側の両方の立場を見ることができます。興味のある方はぜひ本館の歴史部門までご一報願います。一緒に古文書を整理し、歴史の謎に挑戦してみませんか。

（歴史部門：畑中康博）

〈表〉廻文到達と発出のパターン

資料番号	廻達開始年月日	１人目		２人目		３人目		４人目		５人目		６人目		７人目	
		到達	発出	到達	発出	到達	発出	到達	発出	到達	発出	到達	発出	到達	発出
A-008-0098-001	安政４年12/17	斎藤左一介		三浦正親		熊谷政司		鈴木信濃		三浦金五郎		高階出雲		照井総之介	
		→12/19朝	即→	→12/19暮	12/21→	→12/21八つ頃	12/21七つ半→	→12/22暮	12/23→	→不記載	不記載→	→12/25四つ時	12/25四つ半→	→不記載	不記載→
A-008-0099	安政４年12/05	斎藤左一介		三浦正親		鈴木信濃		熊谷政司		三浦金五郎		高階出雲		照井総之介	
		→12/7朝四つ時	即→	→12/7七つ時	12/8九つ時→	→12/9七つ時	12/10朝→	→12/10暮	12/11早朝→	→12/11	即→	→12/12九つ時	即→	→12/13	不記載
E-088	安政４年10/18	照井総之介		熊谷政司		三浦金五郎		高階出雲		鈴木信濃		三浦正親		斎藤左一介	
		→10/18七つ時	即→	→10/19七つ時	10/19則	→10/20八つ半	即→	→10/20午ノ刻	即→	→10/21未明	即→	→10/22	10/25朝五つ時→	→10/26巳ノ下刻	10/27午ノ上刻→
A-008-0093	年不詳06/25	照井総之介		高階出雲		三浦金五郎		熊谷政司		鈴木信濃		三浦正親		斎藤左一介	
		→6/27午刻	即→	→6/28午刻	即→	→6/28夜五つ時	6/29早朝→	→6/29九つ時	即→	→6/29暮六つ時	不記載→	→7/3暮六つ時	7/4朝→	→7/4九つ半	即→
A-008-0102	年不詳06/08	斎藤左一介		三浦正親		鈴木信濃		熊谷政司		三浦金五郎		照井総之介		高階出雲	
		→6/10辰上刻	即→	→6/10未下刻	6/11卯下刻→	→6/11申	6/12早朝→	→6/13八つ時	6/13七つ時→	→6/13七つ半時	6/14早朝→	→6/14七つ半時	6/15早朝→	→6/15七つ時	即→
A-008-0111	年不詳03/18	照井総之介		三浦正親		斎藤左一介		熊谷政司		三浦金五郎		高階出雲		鈴木信濃	
		→不記載	不記載→	→3/21	3/23→	→3/23	即→	→3/23	即→	→3/25	3/26→	→3/27昼九つ時	即→	→3/29七つ時	4/1→

博物館の風景

博物館教室



化石と地層の観察会

男鹿市安田海岸での地層の観察を通して大地の成り立ちを学んだ後、採取した貝化石を使って標本づくりを体験しました。



初級者向け 秋田の中世史教室

１日目は翻刻された史料（古文書）を解読し、２日目は史料に関係する講義を受講しました。今年は、南北朝時代の秋田に関する古文書を教材として使用しました。



初級編 縄文のくらし(衣食)

勾玉づくりや火起こし体験などを通じて、縄文時代の人々のくらしについて学ぶ講座です。写真は、講堂内で体験用の弓を引き、矢を放っている風景です。



貝輪をつくる

柏子所（かしこどころ）貝塚で出土した貝輪について学び、実際にベンケイガイの貝輪を制作して縄文時代のアクセサリーやものづくりについて理解を深めました。



秋田の絞り染め(藍染め)

秋田県で受け継がれてきた伝統的な絞り染めの技術を学びました。絞り方の技術講習、技術チェックを経て、木綿の浴衣地一反分を藍で染めます。



My Jomon Cup

縄文土器やその文様を学び、これを取り入れながら、陶芸用粘土を材料に、縄文土器の作り方でオリジナルのコーヒーカップを作りました。



真澄に学ぶ出張教室−菅江真澄入門−

今年は花輪市民センター講堂で開催しました。集まった方々は、入門的な内容だけでなく、真澄が鹿角周辺を歩いた際の記録についても理解を深めました。

イベント・行事



わくわくおはなし会

毎月最終日曜日に、博物館ボランティア「アイリスの会」のメンバーが大型絵本や組木絵本、秋田にまつわるお話などの読み聞かせを行っています。



防災訓練

地震や火災の発生を想定し、来館者の避難誘導や火災通報などの訓練を行いました。あわせて、国指定重要文化財の分館・旧奈良家住宅では、放水銃を用いた消火訓練も実施しました。



「わけあって絶滅しました。展」特別講演会

特別展「わけあって絶滅しました。展」の開展初日、展示監修者で大人気の図鑑『わけあって絶滅しました。』の著者、丸山貴史さんを講師とする特別講演会を開催しました。



落葉文様のハンカチ作り

長谷川弘子さんのご指導のもと、植物の葉っぱを使ってハンカチを染めるイベントを開催しました。葉脈まできれいに染まったすてきなハンカチがたくさんできあがりました。



高校生インターンシップ

当館では、県内高校生の職場体験も毎年受け入れています。写真は、学芸職員の指導のもと、高校生がくずし字の解読や古文書の整理作業に取り組んでいる様子です。



博物館実習

８月26日から計６日間の日程で、博物館実習を行いました。学芸員資格を取得するために県内外から６名の学生が当館を訪れ、様々な資料の取り扱いなどの実務を学びました。



企画展ギャラリートーク

企画展「シン・秋田画人伝」の開展初日、担当学芸職員が展示の見どころなどを解説しました。当日は50名を超える参加者が集まり、大盛況となりました。

秋田県立博物館ニュース　No.183　2026.11.13発行
編集・発行　秋田県立博物館

秋田県立博物館
〒010-0124　秋田県秋田市金足鳰崎字後山52
TEL：018-873-4121 ／ FAX：018-873-4123
E-mail：info@akihaku.jp
ホームページは「秋田県立博物館」で検索